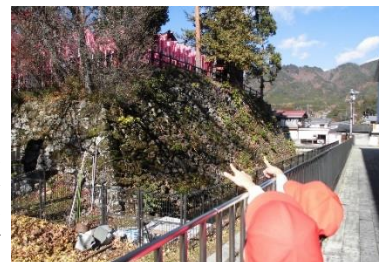


R4年度 「岐阜県ふるさと教育表彰」 実践報告書

市町村名	飛騨市		学校名	飛騨市立古川小学校		
校長名	下出 尚弘		対象学年	全校	人数	425人
項 目 該当する項目1つ 以上に○を付ける	○	① 小・中学校の関連性や発展性を踏まえた実践や、幼稚園、高等学校、特別支援学校等と連携を図った実践				
	○	② 県内施設や地域人材等の外部資源を活用し、岐阜県が誇る自然・歴史・文化・産業等の体験を通して学ぶ取組を効果的に位置付けた実践				
	○	③ ふるさと学習を核として、総合的な学習の時間と各教科、特別の教科道徳等との関連を図った教育課程を編成し取り組んだ実践				
学校の教育目標	心豊かに たくましく 未来を切り拓く～自分から 自分で 自分なら～					
活動のねらい	コロナ禍でストップしていた地域の祭りや歴史遺産について学びを再開することができたことをふまえ、郷土に伝わる歴史文化に興味関心をもつとともにふるさとを誇りに思う心を育てる。					
1. 昨年度の取り組みを踏まえての改善点						
(1) ふるさとアドバイザーのカリキュラム作成への主体的参画						
本校のふるさと教育を支える「ふるさとアドバイザー（FA）」。制度が発足して以来2年間、ふるさと教育を通して目指す資質能力の育成を図るために、学校が主体となって FA に意見を聞きながらカリキュラムの作成を行ってきた。						
3年目の今年は、その学年でつきたい力をより効果的に育成するためのカリキュラム作成・見直しに、FA が主体的に参画した。						
4年生では、「福祉」をテーマにしているが、これまでは主に福祉サービスを必要とする人について学んできた。しかしながら、人は生まれてから年を取るまでどの場面をとっても福祉と関わっているという FA の考えから、昨年度は学習しなかった「助産師による命の授業」が加わった。このことにより、児童は、福祉をより自分事としてとらえることができるようになった。						
(2) 見通しをもって指導するための、他教科との関連を図る指導計画の更新						
昨年度作成した、ふるさと学習と他教科を関連させた指導を今年度も実施することができた。昨年度末・今年度始めに FA を交えて振り返りを行い、他教科との関連も考慮した指導計画に更新したことで、学年の職員が変わっても見通しをもってふるさと学習をすすめることができた。						
2. コロナ禍からの再開によるふるさと学習						
(1) 2年生 生活科 地域を知る「古川祭りと増島城」						
①歴史名人から学ぶ「お城の中にある学校」						
本校は、江戸時代の大名が建てた「増島城」の敷地内にある大変珍しい学校である。地中にまだ石垣や堀が残るなど歴史的にも貴重な文化財の上に学校があることで、地域の自慢にもなっている。						
コロナ禍で2年間行われていなかったが、本年度、地域講師を招いての学びを再開したところ、毎日見ている石垣が江戸時代に作られたものであることを初めて知り、児童も大変驚いていた。						
江戸時代に作られた建物や用水などが、今でも自分たちの周りにたくさんあることや、当時の						


【毎日見ている石垣】



【毎日見ている石垣】

町並みが今でも残っていることなど、普段から親しんでいる場所や物が古くから脈々と根付いていることを改めて学び、ふるさとに対する興味関心を一層高めることができた。

②地域の方に支えられての「町探検・屋台めぐり」

児童が大好きな「古川祭り」。本年度は規模縮小ながら開催されることになり、4月、児童は屋台見学に出かけた。その後、学校が古いお城の中にあることを学び、同じように古くから伝わる古川祭りと関連付けて、地域の歴史文化を学ぶことにした。

2年生では、「町の屋台を深く知る」というねらいのもと、FAと地域ボランティアの協力を得て、屋台蔵の場所と、屋台の「台紋」を調べる活動を仕組んだ。

町の施設「古川祭り会館」で屋台のからくりの仕組みや起こし太鼓のとんぼを体験し、大人になったら祭りで活躍する自分を想像するなど、2年間あまり身近に感じることはできなかった祭りをより自分事としてとらえることができた。

(2) 6年生 総合的な学習「ふるさとの魅力発信！」

①探求の入り口としての「祭り屋台見学」

3年ぶりに再開された古川祭りを、6年生のふるさと学習の入り口として取り上げた。児童の誇りでもある古川祭りが生まれ続けている歴史や、祭りを支える地域の取り組みなど、児童がこれから探求していくふるさと学習への意識づけ・意欲付けをねらったものである。

その後、町づくりや歴史に関わるFAや地域講師4名から話を聞き、自分の興味関心をもとに探求していくテーマを決めた。

(2) 大学生から学ぶ効果的表現方法とふるさとの魅力再発見

飛騨市は大正大学地域創生学部地域創生学科と連携しながら魅力ある町づくりを進めている。地域創生学科の学生達は、それぞれ飛騨市に関わる研究テーマを設定し、調査研究を進めている。学生たちが飛騨市を訪れる機会をとらえ、自分の研究テーマを例にして調査・アウトプットの効果的な方法について、6年生に教えてもらう場を設定した。

大学生の作るプレゼンは、調べていることが小学生にもわかるように作られていること、話し方に抑揚があり聞き手を意識して伝えようとしていることなど、相手に応じて伝え方や見せ方に工夫があることを学んだ。

また、都会の大学生が自分たちの町づくりに関心を持って活動していることを知り、ふるさとのよさを改めて感じることもできた。

3. 成果と課題

本年度、古川祭りが再開されたことは地域・児童にとって待ちわびたものであった。コロナ禍を経て、地域の方の祭りや文化を愛する気持ちを児童も改めて感じることもできた。地域の方の思いに応えていけるように、今後も積極的に地域に出かけ発信し合う機会を持っていきたい。



【歴史博士の茂住さんから学ぶ】



【どんな台紋があるのかな】



【3年ぶりの屋台披露に大喜び】



【テーマ決定の仕方や追求方法について】